0527C1000-01　　**大学における産学連携活動の意義**

なぜ，大学で産学連携を行うのか？　一つの考え方

○北村　寿宏（島根大学産学連携センター）

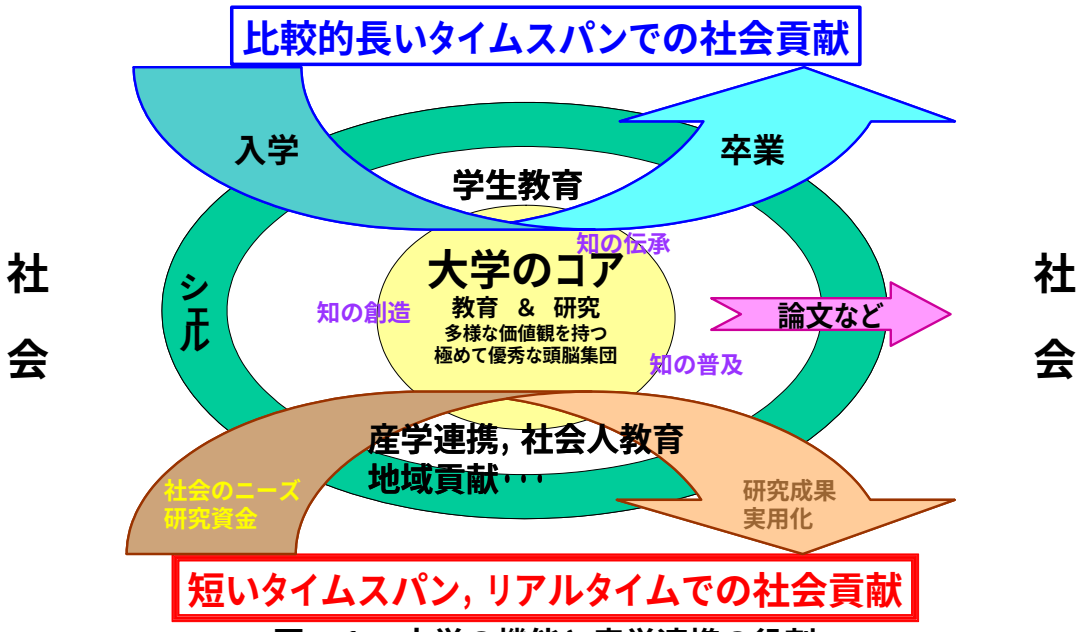
１．はじめに

産学連携活動が活発化し，多くの大学においてはその対応に追われているというのが実状だろう．現在の産学連携の大きな目的は，産業，ひいては，経済の活性化に重点が置かれているように見受けられる．産業や経済の活性化は，産学連携の重要な視点であることには変わりはないが，長期的な視点から，かつ，大学の視点から産学連携の意義を検討し直すことが必要である．このような検討を行うことにより，大学における産学連携活動の基軸が明確になり，産学連携の進め方を検討する上で，また，産学連携と深く関連した知的財産の管理・活用を大学で行う上での基本的な指針が得られると考えられる．

ここでは，地方大学で産学連携の実務を推進してきた立場から，大学における産学連携の意義について考察した結果を述べる．

２．大学のあり方の視点から

産学連携活動を行ってきて思い描いた大学全体のイメージと産学連携の役割について，その概略を図１に示す．



図．１　大学の機能と産学連携の役割

まず，大学のそもそもの役割[1)]であるが，

①極めて優秀な頭脳集団を持つこと

②優秀な集団が，それぞれの価値観に基づき研究・教育を行うこと（知の創造と伝承）

③教育と研究の成果を社会に還元し，社会の負託に応えること（知の普及）

と考えている．

この役割を担い，十分に機能させるためには，中核を担うコアと社会との接点となるシェルが必要であると考えられる．

コア：優秀な頭脳集団が自分の価値観に基づいて教育と研究を行える組織
（能力とモラルの高い，そして，熱意のある人材が必要）

シェル：社会との連携を図る組織　（学生採用，学生就職，産学連携や技術移転などの研究成果の啓蒙・普及など社会とのインターフェースの機能）

従来から行ってきた，大学における知の創造活動と学生教育や論文などによるその成果の伝承と普及とは，大学のそもそもの役割であるとともに社会から負託されたことであり，比較的長いタイムスパンでの社会貢献と位置づけられる．近年，これに加えて，タイムスパンの短い，あるいは，リアルタイムでの社会貢献が大学に求められてきた．これを実現するために，産学連携，地域貢献活動，社会人教育など，新たな活動が進められている．この新た

な活動を行うことにより，社会に対して大学の社会貢献を明確にできるだけでなく，大学内部に向けコアを刺激して知の創造を促し大学のさらなる発展に寄与できると考えられる．

大学として必要なのは，このコアの部分に，如何に優秀な頭脳集団を集めるかと言うこと，あるいは，今いる集団の能力を如何に高めるかと言うことを，早急に検討し実行する必要がある．これと平行して，大学が社会に役立つ，あるいは，期待されるということ示すために，従来の大学では重点化されていなかったシェルの部分を早急に構築し機能させていく必要がある．ただし，このコアとシェルは機能が異なるため，体制整備やその運用が大きく異なると考えられ，それぞれに適した戦略で進めていかなければならない．

３．大学経営の視点から

大学の財政は，特に研究資金については非常に厳しい状況にある．図１の大学のコアの部分を活性化するためには，外部や内部の刺激だけでなく，研究資金の確保が重要な課題である．研究資金の確保は，運営交付金や授業料収入の減少を考えると，大学外部からの導入に大きく依存しなければならないと考えられる．

３．１　リアルタイムの社会貢献のための資金

現在，共同研究や受託研究，寄付金などの形で研究資金が大学に導入されている．これらは，これまで培ってきた大学の研究シーズや研究ポテンシャルを活かして，目的研究，あるいは，実用化研究を行い，リアルタイムでの社会貢献を行うための資金と位置づけられる．

３．２　将来における社会貢献のための資金

本来の大学の使命が「知の創造」であることを考えると，基礎研究は非常に重要である．また，この基礎研究から将来に実用化される可能性のあるシーズの創造や研究ポテンシャルの向上につながる．この基礎研究に充てる研究資金の確保も大きな課題である．この資金の一つとして，企業で実用化され事業化した成果の成功報酬としてフィードバックすることが考えられる．この手段として，特許の使用料や技術ノウハウ料などが考えられる．

現在，大学が保有する特許の使用に関し不実施補償などの問題が挙げられている．しかし，企業側も長期的視点に立ち大学の本来の機能が確保され，かつ，その機能が向上できるよう，産学連携によって実用化や事業化などの成果が認められた場合には，研究資金として大学へ適正なフィードバックを行うことが必要であると考えられる．大学に資金的なフィードバックを行うことで，次のシーズとなる，あるいは，次のポテンシャルとなる基礎研究への資金投入が可能となる．これが，産学連携による大学を活用した一つの知的創造スパイラル（図２）であると考えている．

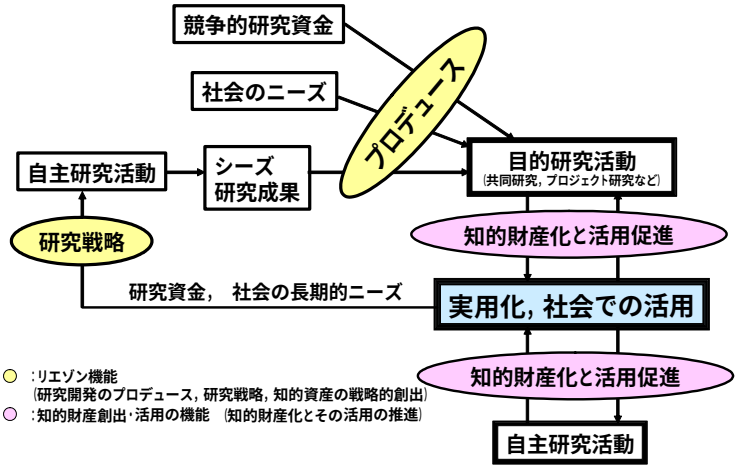


図２　知的創造スパイラル

研究資金の面から考えると，リアルタイムの社会貢献を行う共同研究や受託研究などの研究資金の導入，さらには，基礎研究など将来の社会貢献に必要な研究に充てるべき資金の導入の２つを視野に入れ，大学における産学連携活動を展開していく必要がある．

４．まとめ

大学における産学連携の目的は，大学と社会との相互作用を活性化し社会貢献を活発化すること，また，大学の本来の機能である知的創造活動の性能向上と考えられる．今後の大学運営にとって産学連携活動は不可欠であり，大学のあり方そのものと大学の経営という２つの視点をもって展開していく必要がある．その活動は，大学の中で学部や研究を主目的とした共同利用施設と比較できない特殊性を持っており，効果的な活動を進め，効果を上げるためには，その特殊性に合った戦略と運営が必要である．

【参考文献】1) 生駒俊明　日本経済新聞　平成１６年４月１７日付け

（連絡先：北村寿宏　島根大学産学連携センター　crcenter@ipc.shimane-u.ac.jp　tel : 0852-60-2290）